

会長挨拶 水曜会会長 内田臣哉 (1988年 貝塚研卒)

水曜会会員および関係者の皆さま、MWコミュニティ第2号の発行が遅れましたこと誠に申し訳ございません。さる列強国の首長が頻りにツイートで賑わせている昨今にて“7年目でこんにちわ”ではなんとも面目ない次第です。年1刊行の会報を補う隙間情報発信の場として、ここに改めてタイムリーな話題を提供していきます。今更かもしれませんが今後は SNS を利用するなど手短に交流できる場も設けて行く予定です。現理事会の構成年代を



縦に長くし世代間の風通しを良くしてきましたので次には「年代毎」とし横の関係を強く、線から面へと展開していきたいと考えております。皆さまのご指導ご鞭撻のほどよろしく願致します。

写真は我がマラソンの師と仰ぐ浅井えり子さんとの2ショット。愚生も「ゆっくり走れば、速くなる」を座右の銘としております。

加治屋 亮一 相談役

明治大学を退職してはや2年を経ようとしています。水曜会の皆様には、在職中、退職の際には一方ならぬお世話になり、感謝いたしております。現在、鹿児島を主として暮らしておりますので、住処周りの観光案内をさせていただきます。羽田空港より高千穂峰、現在も噴煙を上げている新燃岳、鹿児島の象徴的な桜島が出迎えてくれる鹿児島空港まで2時間弱のフライトです。空港より住家のある南さつま市金峰町尾下(おくだり)までバスに揺られて70分ほどを要します。鹿児島県は太平洋側の大隅半島と錦江湾を挟んで薩摩半島および屋久島、種子島、奄美群島などの多くの島々で成っています。薩摩半島のほぼ中心、西は東シナ海に面した日本三大砂丘?の砂丘と松の防砂林の美しい吹上浜、東は霊峰金峰山(636m)を望み、3月の中旬に田植えを行い、7月末から8月初頭には収穫(稲刈り)を行う超早期米の生産地である田園の地に尾下はあります。海岸は奈良の唐招提寺の開祖鑑真和上の漂着地の秋目、玉川学園を創立された小原国芳先生の生誕地の久志、古くは遣唐使の寄港地や薩摩藩の密貿易の拠点として栄えた坊津(何れも南さつま市)、鯉節の生産量日本一の枕崎、海にばかりと浮かぶように見える薩摩富士の開聞岳(924m)へ続いている。一回りで1から2時間程度。未確認生物イッシーの存在が話題の池田湖(全長2mの大ウナギは見る事ができる)、砂蒸し温泉の指宿へは1時間ほど、現在NHKで放映中の大河ドラマ「西郷(せご)どん」の背景に度々登場する武家屋敷(薩摩の小京都)や太平洋戦争時の特攻基地跡に建つ平和祈念館の知覧へは30分程度の行程である。南さつま市の中心地加世田(かせだ)は、薩摩島津家中興の祖と言われる日新公を御祭した武田神社(初回「西郷どん」のふるさと紹介で放映)へは10分程度である。温泉は指宿温泉、湯之元温泉、ここが一番近い吹上温泉郷、一時間半ほど足を延ばせば霧島温泉郷と事欠かない。取り留めも無い事をズラズラと書いてしまいましたが、鹿児島に是非おじゃたもんせ、心から歓迎いたします。



尾下保育園



吹上浜



金峰山

服部 道江 （1981年3月貝塚研究室卒業）

（株）大林組 服部と申します。1981年 貝塚研究室を卒業しました。当時は建築業界での女性の求人は極端に少なく、たくさん来る会社説明会への招待状を手にいざ出陣すると「工学部に女性がいるとは思いませんでした」と入場すら断られた、そんな時代でした。そういった中で女性の採用の試行を始めていたのが大林組であり、情報をキャッチした貝塚先生が私の就職のために奔走して下さったのを覚えています。もっとも先駆者である大林組でさえ、当時は女性の安い賃金が目当てだったわけで、私自身、後に現場監督やら本社の管理職になって男性と同じ土俵、賃金体系で仕事をするなど予想もしていなかったことです。

今後も時代の流れと共に更なる追い風、向かい風が吹いてくることでしょう。しかし、技術的なベースをしっかりと固めてさえいれば、そして、その上で、人とのつながりを大切に、知見を養っていけば、どういう風が吹こうとも前に進むことはできます。若い方々には切に、学ぶと同時に人とのつながり、縁を大切にしたいと願っております。

今も続く学生時代の仲間、先輩方との交流は時として風に逆らう元気と勇気の源となっています。水曜会でのつながりも大切にさせていただきます。今後ともよろしくお願い致します。



渥美 麻理 (1997年加治屋研究室卒業)

趣味とわたし。趣味が仕事になれば、毎日が楽しくてしょうがない。

そんな幸せな人は、ほんの一握りですが、もしかしたら私はその一握りの人ではないかと思っています。私は97年に大学を卒業し、国内の建材メーカーに就職しました。初めは内装建具の設計や企画を担当。自分で企画した商品が形になるということが嬉しく、やりがいも感じていました。それなりに経験も積んだ頃、カタログの制作を担当する部署に突然の移動。これが今の私の仕事であり、趣味になりつつあります。カタログの制作で最も大切なことは「思い」を発信し続ける事です。「思い」を伝え続けると、自然と人が集まってきてチームができます。答えのある作業ばかりではないので日々悩み、ドキドキしますが、そのため毎日が新鮮です。トレンドや日々進化していくテクノロジーなど、置いていかれないように気を使います。刺激的でワンダフル。いつまでも必至に、楽しく取り組んでいきたいものです。



白鳥 和洋 (1996年加治屋研究室卒業)

大学卒業後に新菱冷熱に就職しましたが、現場監督という仕事が「本当にやりたい仕事なのか?」という疑問を持つようになり、23歳の時に転職を決断。それまで趣味だったサッカーを仕事にしたいと思い、番組制作会社に入って「UEFAチャンピオンズ・リーグ」というサッカー番組のADとして働くようになりました。そこで当時「ワールドサッカーダイジェスト」の編集長と出会い、その縁で現在も務めている日本スポーツ企画出版社に入り、サッカー雑誌制作に携わっています。入社当時は「ワールドサッカーダイジェスト」の編集スタッフとしてイングランド代表などを任せられ、日本国内のサッカーを追う「サッカーダイジェスト」編集部へ異動してからはFC東京、日本代表をメインに取材しています。「サッカーダイジェストweb」で名前を検索してもらえれば、記事が出てくるはず。今はその「サッカーダイジェスト」の編集長として、日々精進しています。



野本麻貴 1999年 加治屋研究室卒業

現在私は大成建設(株)設計本部設備設計電気設計として勤務いたしております。なぜ電気設計なのか?今に至った経緯があります。大学では建築環境デザイン研究室在籍だったため、卒業後、現在の会社に入社し衛生・空調設計として勤務することになりました。当時は就職氷河期とも言われ採用数の少ない年でした。そんなこともあり一人で衛生・空調・電気的设计ができるような人材作りを目指した社内教育を受け、衛生・空調だけではなく電気設計者としても職務を務めておりました。その後3年勤務しましたが、出産を機に一度退社し、2016年10月、大変ラッキーなのですが復職の機会があり元の職場に復帰することになりました。復帰に際して当時受けた教育を活かして電気設計をして欲しいとのお話があり、経験を活かせればと電気設計者として勤務することになりました。経験も浅いため勉強することの多い毎日を送っていますが仕事、子育て、勉強、趣味と慌しくも充実した日々を過ごせていることに大変感謝しています。

